

奏であう人

vol.61



せいの まゆみさん(西川町)

昭和54年生まれ、西川町出身・在住。「月山和紙のあかり」アーティスト。東京の専門学校進学、会社勤務を経て、2000年、実家の志津温泉 旅館仙台屋で使う月山和紙を用いたあかりの制作を始める。2004年より講師活動もスタートさせ、2012年からは各種イベントにも出店。2013年に初個展を開催し、2016年にはイタリア・ミラノ「SAKEYA」にて展示・販売を開始。その他、あかりの演出や店舗照明制作なども手がける。

郷土への愛が、仕事や活動の原動力に

地元の伝統和紙の温もりを作品づくりに込めるせいのさん、地域の魅力をデザインでつなぐ宮城さんのお二人に、故郷への思いを形にする生業なりわいについてお話を聞きました。



みやぎ たえ 宮城 妙さん(鶴岡市)

昭和54年生まれ、鶴岡市出身・在住。武蔵野美術大学卒業後、東京で家具デザイナーとして勤務。2012年、夫婦でUターンし、翌年にハミングデザイン設立。店舗・グラフィックデザインなど、庄内を拠点にモノ・コト・空間づくりに取り組むとともに、実家の鈴木さくらんぼ園を家族で営みながら、半農半デザインの生活を送っている。手づくりをテーマとしたお店が集う「こしゃってマルシェ」も主催する。やまがた若者応援大使。



宮城さんが手がけた作品の数々。地元の観光やイベントのPR、農産品のパッケージやパンフレット、農林業のプロジェク、キャラクターデザイン、店舗のロゴやサインなど実に幅広く、どれも地域の農業や手仕事への愛情が感じられる。

「故郷」を素材・題材にしたモノづくりとデザイン

「曾祖母の実家が月山和紙なりわいを生業にしており、残っていた昔の和紙を何かに使えないかと。」

せいのさんは、「月山和紙のあかり」を手がけ始めたきっかけをこう話します。その制作は小さい頃、ゴム風船に新聞紙を貼ってお面をつかった記憶がもとになっているとか。「同様の技法でランプシェードを作れるのではないかと、独学で試行錯誤しながら、現在まで続けています。」

一方の宮城さんは、東日本大震災の翌年に、南三陸町出身の夫とともに自身の故郷に戻り「半農半デザイナー(農業とデザイン業の兼業)」の日々を送っています。「こしゃってマルシェの運営などを通して、少しずつ人間関係がつながり、現在、デザインの仕事は9割以上が山形県内の案件です。」

実家のさくらんぼ園は、夫が農作業を、私はホームページやSNSなどの情報発信などを担当しています。」

県外に出たからこそ気付いた故郷の魅力

宮城さんが話を続けます。

「東京での仕事は好きでしたが、充実していましたが、同時に私がいなくても…という思いがありました。その感覚が、山形に戻ってきて変わったのです。ここには、以前は気付かなかった、昔ながらの知恵や農業をはじめ、貴重な手仕事がたくさん残っています。デザインを通してこれらを未来へつなげ、地域をより良くしていくことが自分のライフワークだと思っています。」

せいのさんが大きくうなずきます。「まるで、私の気持ちを代弁していただいているようです。生まれ育った志津をなんとも思わずにいた私ですが、体調を崩して帰ってきた時に、植物の形、四季の色、水と空気に五感が癒されたと感じました。月山和紙も同じ土地で生まれ、受け継がれてきました。あかりづくりに、自然素材がもたらす癒しと、この地域の伝統を守りつないでいく役目があると思っています。」

自分たちの住む土地の魅力がさまざまな出会いを育む

「風“は移動してきた人、土“は定住している人、この二つが合わさること、その場所の“風土“を作ると言われています。私は“土の人“として、こしゃってマルシェを通して、子どもたちに山形の豊かな自然や故郷の魅力、多様な文化にふれる機会を提供していきたいです」と話す宮城さん。これに、せいのさんが応えます。

「旅館業も、風“であるお客様と、土“にあたる地元の人や自然との出会いの場。ですから、『月山和紙のあかり』は、月山を見て直じかに感じてもらいたかったので、基本的にインターネットでは販売していません。」そして、「年齢も近く帰郷し地元の良いに気付いた点など、月山を挟んで同じような生き方をしている人を知ることができて、とても嬉しいですね」と二人は声を揃えます。あかりづくりも、デザインも一つ一つがいていねいな手仕事。そこには、山形の魅力が宿っています。

